



# 埋文だより

第28号

平成14年3月12日発行

## 『埋文センター10年の歩み展』開催 —文化財功労者表彰式も—

鹿児島県立埋蔵文化財センターは、平成4年の開所から今年で10年目を迎えました。この間、事業量も増え、現在では職員数75名の事業所となっており、県内全域で発掘調査を行っています。

そこで、この10年間の発掘調査成果を紹介し、埋蔵文化財行政への理解を図ることを目的に、文化財保護強調週間である11月1日から11月7日までの間、「埋文センター10年の歩み展」を開催しました。また、11月1日には当センターにおいて「文化財功労者表彰式」も行われました。

期間中、上野原遺跡出土の重要文化財をはじめとした県内出土の土器や石器、移設された集石遺構、発掘調査用具などの展示や「火おこし」「勾玉づくり」「アングン編み」の体験活動などを行いました。

さらに、11月3日には「遺跡報告会」を実施し、「京田遺跡(川内市)」、「尾ヶ原遺跡(金峰町)」、「芝原遺跡(金峰町)」、「根本原遺跡(鹿屋市)」の発掘調査について調査担当者が報告を行い、最新の発掘成果を紹介しました。

県内外から多くの方々が来所され、鹿児島島の地に太古から生きてきた人々の息吹を感じていただけたのではないかと思います。



「10年の歩み展」オープニングセレモニー



文化功労者表彰式

### 目次

頁

- ・「埋文センター10年の歩み展」開催…1  
—文化財功労者表彰式も—
- ・「上野原縄文の森」で新たなスタート …2・3  
—新埋蔵文化財センター完成間近—
- ・遺跡紹介 …4・5
- ・館内見学の案内者から …6  
—人間模様、豊かに—
- ・進む木製品の保存処理 …6  
—センターの技術の進化—

鹿児島県立埋蔵文化財センターの見学は、  
日曜日・祝日・年末年始を除き、毎日午前9時～午後5時まで。  
入館料は無料です。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

## 「上野原縄文の森」で新たなスタート

### —新埋蔵文化財センター完成間近—

国内で最古最大級の定住集落跡である上野原遺跡は、その保存と活用を図るため、「上野原縄文の森」として整備が進められています。現在、始良町重富にある埋蔵文化財センターも平成14年4月からこの中に移転することになっており、準備が急ピッチで進められているところです。

そこで、ここでは当センターの新たなスタートに先立って、「縄文の森」の様子をそっと眺めてみることにしましょう。

国道10号線から上がって来た道路の北側は、見学エリアとなっています。駐車場に車を停めて東に進むと上野原台地を形成する地層が見られる地層観察館、その先には9500年前の集落を再現した復元集落、さらにその先には国指定史跡として埋め戻されている中に遺跡保存館があり、住居跡や土坑などが見学できます。

引き返して、展示館の建物の中に入ってみましょう。入口で案内を受けた後、大きな吹き抜けを通して常設展示室に入ると、そこには南九州に花開いた縄文の世界が広がっています。上野原遺跡の9500年前のムラでの生活の様子の再現、7500年前の埋納された壺形土器などが目に飛び込んできます。考古学とそのほかの科学によって人々の歴史が解明されつつある状況が提示されます。また、子どもたちの遊び場も作られることになっており、楽しみです。企画展示室での展示も、期待されるところです。

それでは、橋を渡って南側の埋蔵文化財センターに行ってみることにしましょう。2階から入ると、



復元公開区から見た工事中の展示館

#### 《埋文センターのこれまでのあゆみ》

- 平成4年 始良町重富に埋蔵文化財センター開所
- 平成6年 埋文センター所旗を制定
- 平成8年 組織整備 (調査課3係制)
- 平成9年 南日本文化賞特別賞受賞
- 平成10年 上野原遺跡(3工区)出土品、国の重要文化財に指定
- 平成11年 上野原遺跡(4工区)が国の史跡に指定
- 平成11年 「上野原縄文の森」(仮称)基本計画策定
- 平成12年 「上野原縄文の森」(仮称)整備着工
- 平成13年 「10年の歩み展」開催



考古学や遺跡についてもっと深く研究したい人のために、図書室が常時間かれています。いろいろな情報を検索することも可能になります。階段を使って1階に降りると、整理作業室が廊下から見学できます。出土品の水洗いから実測、トレースなど報告書ができるまでの作業の流れが概略わかんと思います。出土した遺物の分析や各種処理の作業を行う部屋も、現在のセンターから引き続き充実を図っています。

センターの外側は体験エリアとなっています。古代の建物が立ち並び、火おこしや土器作りなど縄文時代の生活を体験するコーナーもあります。中央の広場では弁当を広げたり、縄文の森の風を体いっぱい受けたりすることができます。展望の丘に登ると、眼下には錦江湾、遥か遠くに桜島が望め、充実した古代の一日を満喫できるでしょう。

平成14年10月にオープンする「上野原縄文の森」の完成も間近です。オープン後は、ぜひおいでください。

# こうなる！ 上野原縄文の森



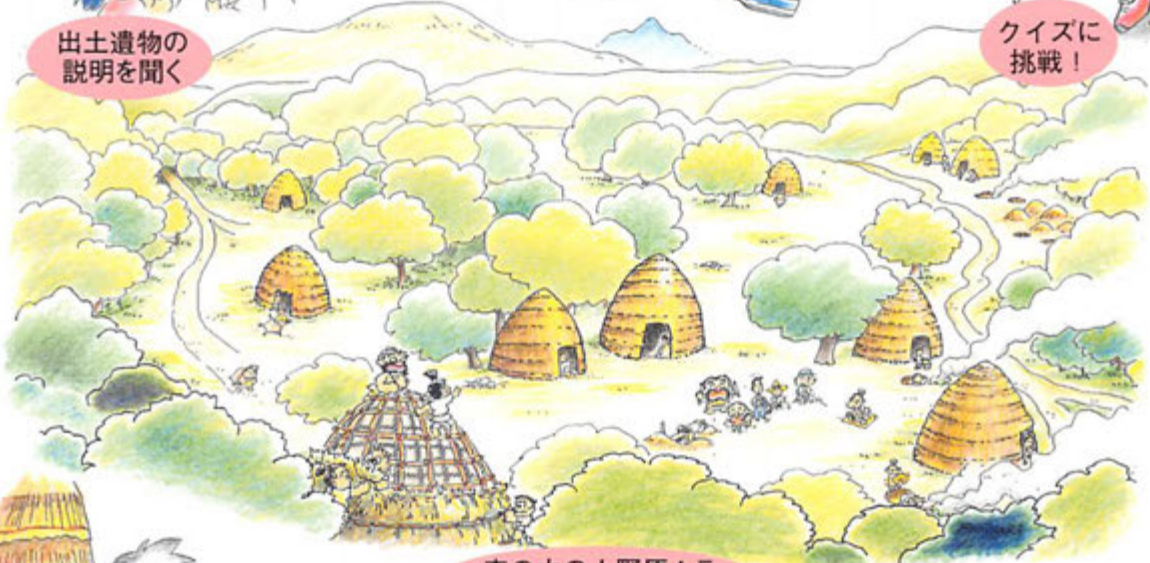
出土遺物の説明を聞く



上野原縄文ムラにレッツゴー



クイズに挑戦！



森の中の上野原ムラ



当時の家を探検！

復元家屋の前で生活体験



展示館に感動！



あなたも縄文ファッションデザイナー



山の幸どっさり



いのしし狩りにチャレンジ



集石で蒸し焼き料理



## 遺跡紹介

### 縄文時代草創期の竪穴住居跡を検出 —三角山遺跡—

三角山遺跡は新種子島空港の建設に伴って、平成7年から調査が行われている遺跡で、西之表市と中種子町にまたがった標高約240mの台地に立地しています。

本年度の調査で、縄文時代草創期（約12,000年前）の竪穴住居跡と考えられる遺構が2軒発見されました。2つともほぼ円形をしており、1号住居跡からは中央部に炉と考えられる真っ赤な焼土がみつかりました。また、当時生活していたと思われる床面からは、その時期の土器である隆帯文土器の破片も出土しました。

県内では、三角山遺跡を含め4遺跡から縄文時代草創期の竪穴住居跡が発見されていますが、事例が少ないだけに重要な資料となることでしょう。



2軒が並んで検出された竪穴住居跡

### 古代官人のベルト —芝原遺跡—

芝原遺跡は日置郡金峰町にあり、万之瀬川の河川改修に伴う発掘調査が継続的に行われている遺跡です。前回の「埋文だより」第27号で多口瓶が出土したことを紹介しましたが、今回は、律令という古代の制度のもとで役人が締めていた革帯の飾りである蛇紋岩製の石帯が出土しました。

これは、片面のみ磨かれた蒲鉾のような形をしており、長さ2.6cm、高さ2.1cm、厚さ0.5cmで、直径1.5mmの孔が3か所にあいており、数個を横に並べて帯に縫いつけて使用していたもののひとつです。県内では3遺跡4例目となり、律令制度がこの地域周辺にまで及んでいたことを示す注目される遺物です。



蛇紋岩製の石帯

### 北側の廂の目的は？ —安茶ヶ原遺跡—

安茶ヶ原遺跡は日置都市来町にあり、串木野市との境の八房川を見おろす標高約25mの台地にあります。南九州西回り自動車道川内道路建設に伴って、平成10年度から調査が行われている遺跡です。

平成11年度には、四方向に廂を持つ四面廂建物跡が2棟検出されましたが、本年度は一方向だけの片廂建物跡がみつかりました。それも、廂を北側に設けていることから、日除けとは異なることが考えられます。

そのほかに、佐賀県腰岳産と考えられる黒曜石の剥片10個がまとまって出土し、当時の交流・交易を考えるうえで貴重な資料といえそうです。



片廂建物跡

## 縄文の落とし穴 —根木原遺跡と桐木遺跡から—

根木原遺跡は、国道220号線の古江バイパス建設に伴って、平成9年度から調査を行っています。

昨年度の調査で、縄文時代草創期以前と考えられる落とし穴状遺構が12基見つかり、本年度の調査では、さらに2基見つかりました。これらの遺構は、谷の斜面に並ぶように位置していました。

桐木遺跡は、東九州自動車道末吉インターチェンジ建設による国道10号線の改修に伴って調査が行われた遺跡で、平成12年度の調査で落とし穴状遺構が1基見つかり、本年度の調査では2基見つかりました。床面には、逆茂木(獲物を仕留めるための杭)の跡と考えられる柱穴も見つかりました。これらの遺構は、遺跡の北東から北西方向に入り込む谷を横断するように、ほぼ直線上に並んでいました。

どちらの遺跡も谷につくられており、当時の人びとは地形をうまく利用して獲物を捕っていたことがわかります。



落とし穴群(根木原遺跡)



逆茂木の跡が残る落とし穴(桐木遺跡)

### 埋文だより第28号で取り上げた遺跡の位置



※本図は地図をもとにパソコンにより作成したものである

## 館内見学の案内者から

—人間模様，豊かに—

埋蔵文化財センターには、学校の遠足や修学旅行、地域の老人クラブや町内会、それに、県外からの視察などいろいろな人が上野原遺跡と組み合わせて見学に訪れます。その方々を職員が案内して回るのが、その際の様子を一部紹介してみたいと思います。

見学者の中には興味をもって質問する人あり、収蔵庫の中も隅々までじっくり見て歩く人あり、逆にソファで遠い時代に思いを馳せている人ありと、それぞれ千差万別の様子で館内を回って行かれます。

展示コーナーの見学で関心が高いのは、時代ごとに各遺跡に明かりがつく大きな県内地図や、高さ5mにも及ぶ落とし穴のパネルなどです。子供たちの中でも男子は黒曜石の矢じり、女子は装飾品に興味をもつ子供が多く、特徴的です。また、子供たちは発想が豊かで、時として想像もしないような質問も飛び出して、目を丸くさせられることも多いようです。

整理作業の見学では、何を手がかりにすれば土器片がつながるのがわかるのかとか、買えばいくらくらいするのかなど、素朴な疑問やおもしろい質問も作業員さんに浴びせられるようです。

人に話すことの難しさを実感すると共に、縄文時代を始めとした県内の遺跡が、県外の人たちから注目されている事実、また、“物事は発想から生まれる”といった人生観とでもいうべきものを教わったりと、とにかく充実の日々だといえるようです。

これからもセンターへ見学に来ていただき、いろいろと教えていただきたいものです。



## 進む木製品の保存処理

—センターの技術の進化—

遺跡の発掘調査を行うと、昔の人が作ったいろいろな道具がでてきます。これまでに発見されたものは、土器や石器などのように土の中で腐らないものがほとんどでした。ところが、最近、川の近くなどの水はけの悪い場所から、木で作られた約二千年前の鍬や弓などが水に浸かった状態で発見されました。



木製品の保存処理

これらの木で作った道具は、水中から取り出すとすぐにひからびて変形してしまうので、薬品をしみ込ませて固める必要があります。現在、埋蔵文化財センターでは、ポリエチレングリコールという薬品を使って、木製品の保存処理を行っています。しかし、その処理は難しいために、まだ実験の段階です。将来、遺跡から出土した木製品を見学できるような保存処理の準備が急ピッチで進められています。

埋文だより 第28号

発行日：平成14年3月12日

編集・発行

鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-5652

鹿児島県始良郡始良町平松6252

TEL 0995-65-8787

FAX 0995-65-8117

E-mail: maibun@po.pref.kagoshima.jp